



行事案内

企画展

- 金石文拓本写真パネル展
9月7日(火)～9月26日(日)

特別展

- 熊本県・沖縄県交流展
「熊本県の歴史と文化」
10月30日(土)～11月28日(日)

特別講演会

- 「永青文庫と細川家」 講師：細川護貞（細川家17代当主、永青文庫顧問）
- 「考古学上からみた熊本」 講師：乙益重隆（国学院大学教授）
10月30日(土) 午後2時～5時

博物館文化講座

- <100回記念>
「博物館の歴史展示について」
講師：坪井清足（奈良国立文化財研究所長）
10月16日(土) 午後2時30分～4時30分

自然展示室をオープン

— 豊かな沖縄の自然を紹介 —

永い間の懸案であった自然展示室を今年の5月に開室しました。展示室は、1階ロビーの左奥にあって、従来特別展示室として使用していたところです。

琉球列島は、複雑な地史をたどり、その結果、わが国においても特異な生物地理区をつくり、東洋のガラパゴス、と呼ばれ内外多くの学者から注目を集めている地域です。これまで、熱帯の様相を示す青いサンゴ礁の海と西表島の原生林のおりなす本県の自然について、総合的な紹介をしたところがなく、早い時期に自然室を開室するよう強い要望がありました。展示は、不十分ではありますが、県内の児童生徒に対しては自然学習の一助となり、また県外の方々に対しては沖縄の自然の一端を紹介できるものと確信しております。

県民の方々のより一層の指導助言をお願いいたします。

第5・6回 移動博物館終る



伊江村の会場において

当館は、離島・僻地の多い本県において、博物館として何ができるのか、それを創立以来の課題の1つとしてきました。その試みのひとつとして、昭和54年に久米島で第1回目の「移動博物館」を実現しました。

今回は、各々伊江村（5月22～23日）と本部町（5月28～30日）との共催で実施し、大好評のうちに終わりました。

なお、展示品は自然史から美術工芸品まで総点数134点以上におよび講演会や映写会も行いました。また総入場者は、伊江島1,608人、本部町3,785人でした。次にたくさん寄せていただいた感想文の中から2点ほど紹介いたします。

移動博物館を見学して

本部町水納小 5年 与那嶺健二

博物館に入ったとたんに、むかしの沖縄の写真が目に入った。建物の中には、500年ぐらい前のものから現在の建物もある。ここでは、最初のおどろきだった。

次の所に進んでいくと、そこには、約7000万年前ぐらいのタルボサウルスの頭こつがあった。あんまり大きくて、しかも歯はナイフのようだ。肉がついていれば、頭の重さは、100キログラムもあるということだ。ぼくの体重の何倍かなと想像した。頭の重さが100キログラムくらいだから、体全体では何十トンとなるだろうなと思いました。このきょうりゅうが、他のきょうりゅうをおそっている様子を思いうかべ、おそろしくなってきた。もしこの時代にぼくがいたらどうしようかなあと考えた。こんな大きな動物が、大むかし地球上にいたのかと考えしんじられなかった。プロトケラトプスは、全体のほねがそのままあった。このきょうりゅうは、小さくてタルボサウルスがまるのみできそうだなと思いました。ぼくは、きょうりゅうの本を読んでいて、どうして最後によくサウルスとつくのかなあととてもふしぎに思ったことがあります。

次の大きな牛がえるは、25センチくらいでおなかは大きい。まるで功先生みたいだなと思いました。こんな大きなカエルは見たことがないので、とてもきょうみもちました。ぼくが今かっているカエルの15倍もあるみたいです。

映写会は、戦前の沖縄の様子だった。はだしで、きもの、今の沖縄の様子とは、想像もつかない。校長先生のお話しによると、ベン当はいつも小さなおいもだったそうです。とてもかわいいそうだなあと思いました。むかしの子供はよく働いたそうです。お母さんもおっぱい働いたそうです。移動

移動博物館を見学して

本部町瀬底中 3年 屋富祖末美

5月29日、土曜日、私達は、移動博物館見学に行きました。

戦前の沖縄の事は、全然知らない私にとってあのパネルは、沖縄を知るうえで大きな学習になりました。

私の目的は、「善行家風」を見るということでしたので、拓本写真パネルが展示されている所に長い間いました。「善行家風」というものは、天保2年清の道光11年(1831年)尚育王時代、本部間切瀬底村前地頭代、健堅親雲上(上間家5世)に下賜された掛床字ということがわかりました。私達の学校には、石でつくられた「善行家風」があります。私は、中学2年生の時に、郷土研究クラブに入っていました。その時『善行家風について』クラブの先生が説明してくれたが授業に真剣さがなかったためあの時の先生の説明は、あまり覚えていません。3年生になって移動博物館の展示品目録を見ていると拓本写真パネルの所に「善行家風」と書かれているのを見て、「善行家風」は、展示されるほど大事なもののなかなと思いました。

本物の「善行家風」は、上間啓秀氏が持っているということがわかりました。上間氏は、現在名護に住んでいる。ぜひほんものを見たいものだ。

私が見たことのないいろいろなものがこの移動博物館によって見ることができ、とてもいい学習でした。

博物館にきているいろんなことをしりとてもよかったですと思いました。

博物館の牛ガエルよりもっと大きなカエルがいるかどうか、きょうりゅうの中で、一番強くてきょうぼうなのは、どれか、など図書館へ行って調べてみたいなあと思いました。

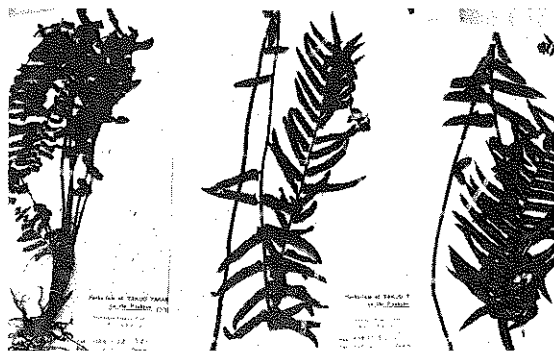
資料紹介

植 物

— 高良拓夫氏寄贈シダ植物腊葉標本 —

奄美大島以南の琉球列島、すなわち中琉球（奄美・沖縄諸島）、南琉球（宮古・八重山諸島）に自生するシダ植物は、32科293種（変種を含む）知られ、そのうち本県には約200種分布している。ちなみに、最も多いのはオシダ科の18属93種で、ワラビ科の14属53種がこれに次ぐ。

今回、高良拓夫氏（県立南風原高校教諭）から130種850点のシダ腊葉標本の寄贈をうけた。これは、同氏が1957年から1982年の25年間にわたり、県内のほぼ全島で採集したもので、身近な種類はすべて含まれている。その中には、県内の限られた地域にしか分布していないようなマキノシダ、オトメシダそれにヒメウラジロがあり、また沖縄島南部百名のミヤコジマハナワラビ、那覇市松川や識名園のイヌトクサなど、開発やその他の原因で、もはやその場所では確認することのできない、同氏にとっては思い出深い貴重なシダも含まれている。

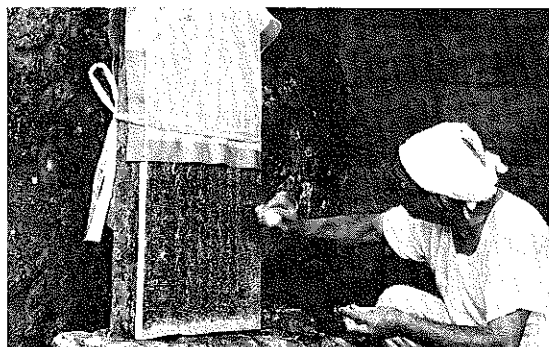


標本は、寄贈者の性格をあらわすかのように、きれいにラベリングし、整理されたものである。

なお、標本の一部は、自然展示室に展示し公開している。

「金石文拓本・写真パネル展」 開かれる

企画展



採 拓 風 景

戦前、本県には那覇・首里を中心として、多くの梵鐘や石碑・墓碑などの金石文が存在した。これらの金石文は、寺社建造の際に鑄造された梵鐘、橋を築造した際に建立される石碑など、社会的なできごとや記念すべき事業を完成したり、特定の歴史上の人物を顕彰し、あるいはある事象の縁由・来歴を刻して、後世に伝えるために造られたものである。しかし、これらの金石文の大半は今次大戦で消失・破壊され、現存するものはきわめて

○期日：昭和57年9月7日～26日

○場所：特別展示室

少ない。

そこで、戦前採拓された最古の「安国山樹華木之記」や、すでに存在しない「国王頌徳碑」・「真玉湊碑文」・「中山第一」のような拓本・写真パネルを現物大に近い状態で展示し、本県の歴史の一端を語る金石文を通して、広く県民の文化に対する意識の高揚と普及をはかる一助になればと思い、企画展「金石文拓本・写真パネル展」を開催することにした。

展示内容は、拓本軸物12点、写真パネル26点のほか、採拓用具・タンポ製作工程・採拓工程写真・扁額及び額装見本・分布図などを展示。また、会期中の9月19日には、沖縄県文化財修理技術者協会との共催で、拓本教室「博物館で拓本を採ってみませんか」と題する採拓の実技講習会を実施する。

博物館文化講座100回記念

——講師に坪井清足氏（奈良国立文化財研究所長）

- 演題 博物館の歴史展示について、
- 日時 昭和57年10月16日(土)
午後2:30～4:30
- 場所 県立博物館講堂

昭和49年5月に第1回目の文化講座を開始して以来、今年度の10月で100回目になります。博物館には、多角的活動が必要であり、そのために提案されたひとつが文化講座でした。さらに、これは常設展示の展示内容を補充するものであり、また将来の友の会結成にむけてのものでした。

講座は、手作りのレジメを用意し、毎月第四土曜日の午後2時30分から4時30分まで行い、定着した行事となりました。これまで(98回)延べ73人の講師により自然関係29件、人文関係58件それに実技・実習11件の講座を実施し、参加総人数は6,936人(1回平均71人)になります。

なお、当館では、この100回を記念し、博物館友の会(宮里朝光会長)との共催で、上述の要項で講演会を予定しております。多くの方々の御来聴を心から歓迎します。

沖縄県立博物館協議会開催

県立博物館に博物館協議会があり、年間3回開催している。昭和57年度第1回目の協議会を7月27日に開き、今年度の特別展『熊本県の歴史と文化(熊本県・沖縄県交流展)-』の準備が順調に進歩していること、新館建設計画の延期などを報告、新館建設について委員の活発な質疑あり。協議会終了後懇親会をおこなう。委員名、役職は下記のとおり。

- 会長 安次富長昭(琉球大学教授)
- 副会長 福地 曠昭(県教職員組合副委員長)
- 委員 野原 朝秀(琉球大学教育学部教授)
- 〃 外間 政彰(那覇市立図書館長)
- 〃 高宮 廣衛(沖縄国際大学文学部教授)
- 〃 真栄田邦男(元首里高等学校長)
- 〃 宮里 悦(沖縄婦人連合会会長)
- 〃 岸本 利実(元県議会文教厚生委員会委員長)
- 〃 新川 明(沖縄タイムス編集局長)
- 〃 新田 卓磨(元琉球新報社編集局長)

—特別展—

熊本県・沖縄県交流展の準備進む

○期日 10月30日(土)～11月28日(日)

第10回熊本県沖縄県連絡協議会で、本県から提案された文化交流が実現したものです。これまで熊本県立美術館や市立博物館と数回にわたる綿密な打ち合せの結果、出品物の選択も完了し、準備は予定通り進んでおります。雄大な阿蘇の自然を背景にして、国宝や重要美術品など800点余を展示し、熊本県を紹介いたします。また、熊本県は、去った大戦の時の本県からの疎開地の1つであり、親身の世話を受けた忘れ難い所でもあります。本館では、疎開関係の資料も同時に展示し紹介する予定で、その準備も進めております。資料をお持ちの方々の御協力を切に希望いたします。

●博物館資料寄贈者名簿(敬称略)

(昭和57年4月～9月)

数多くの方々から、たくさんの資料を寄贈していただきました。博物館資料として大切に保存・活用させていただきます。今後とも本館の充実のために御協力下さいますようお願い申し上げます。

【地学】大山盛保(港川人化石頭骨レプリカ他1点、那覇市)、多和田真淳(メキシコ産魚化石、那覇市)、山城健一(鳥化石、那覇市)、石嶺実彦(珪化木、北中城村)、仲嶺俊子(アンモナイト、名護市) 【動物】松本實禎(タイワンキョン剥製、那覇市) 【植物】高良拓夫(シダ植物850点、那覇市) 【理工】翁長清勝(安里駅の線路レール、那覇市) 【民俗】新垣良弼(サギパーキー他4点、那覇市)、奥浜真昌(碗、那覇市)、知名定義(蠅取り器他5点、那覇市)、崎浜美智子(フチユクルピン他10点、宜野湾市)、島常賀(酒壺、那覇市) 【美術工芸】奥浜真昌(木葉天目、那覇市)、渡名喜明(菱花文緯緋腰巻、与那原町)、上原之節(朱漆堆錦小箱、東京都)、上江洲均(コバルト鉛打中皿、那覇市) 【歴史】吉戸直(使日雑詩、那覇市)、奥浜真昌(硯、那覇市)

沖縄県立博物館だより No.14

発行年月日 昭和57年9月25日

編集・発行 沖縄県立博物館

住 所 〒903 那覇市首里大中町1-1

TEL 0988-86-4353

84-2243